
リリカルなのは00 StrikerS

過ちは繰り返させない！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは00Strikers

【Nコード】

N6645Y

【作者名】

過ちは繰り返さない！

【あらすじ】

爆発で起こった次元断層に刹那とフェルトは吸い込まれる。果たして刹那とフェルトの運命は！？ガンダム00となのはStrikersのクロスです。

ブローグ

刹那とリボンズ、二人のイノベーターの戦いが終わろうとしていた刹那の愛機のリペア機『ガンダムエクシアリペア?』は一時的にブーストモードを可能としている

それに武装はGNソード改、GNビームサーベルがある

そして0ガンダムは、特に変わった武装はなかった

2機は、構えた

0ガンダムは、盾を捨てて、背中からGN粒子を最大に放出し、両手でビームサーベルを構える

エクシアは右手の実体剣を0ガンダムに向けて、背中からGN粒子が何重にもなって吹き荒れる

そして2機は、最大のスピードで走った

そしてエクシアのコックピット付近にビームサーベルが突き刺さり、0ガンダムにはGNドライブごと貫いた実体剣が刺さっていた

2機は沈黙したあと、爆発を起こしたが、それがきっかけで、次元に穴があいてしまった

刹那は、気絶した状態で、エクシアと共に穴に吸い込まれていった

フェルトたちはヴェーダから貰った情報で刹那の位置を特定したが、

「エクシアの反応、ありません」

そのポイントにエクシアはいなかった
フェルトの目元には涙が浮かんでいた

「まだあきらめないで！フェルト、小型艇でエクシアの搜索を！」

「了解…！」

そしてフェルトはブリッジを出ていった

小型艇に乗り込み、フェルトはヴェーダがくれた情報にあったポイントに向かっていった

フェルトの中には期待と不安が入り混じっていた

（刹那、無事だよね？）

そんなことを思いながらフェルトはポイントに向かう
そしてそのポイントに着くと、おかしいものを見つける
それは、断層のようなものだった

「何あれ？」

フェルトは小型艇を近くまで向かわせる
すると、

「えっ!？」

小型艇が操縦不能になり、断層に向かっていく
そしてフェルトは断層に吸い込まれていった

episode 1

「うっ、ここは？」

刹那は目を覚ますと、そこは地上のどこかの森の中だった
辺りを見渡すもエクシアもない
それに服もソレスタルビーイングの制服になっていた

「一体何が起きたんだ？」

刹那は立ち上がろうとした瞬間、手に違和感があった
それは、刹那の手を誰かが握っていたのだ
刹那はその者の名を口にした

「フェルト……」

刹那の右横でフェルトが眠っていたのだ
フェルトもソレスタルビーイングの制服を着ていた
そしてフェルトが目を覚ます

「あれ？…刹那？」

そしてフェルトの目元に涙が浮かび上がる

「刹那！」

フェルトが刹那に抱きついてきた

刹那は一瞬戸惑った

だが、すぐに落ち着いてフェルトの頭を撫でる

「心配をかけたな…」

「ううん。刹那が無事でよかった」

フェルトは笑顔を見せる

刹那は口元を一瞬緩め、すぐにいつもの表情になる

「しかし、ここは一体？」

「私はエクシアを探していたときに、空間に穴があいていたからそれを調べようと思ったたら、その穴に吸い込まれて…」

「…そうか……」

刹那は表情を暗くする

「でも刹那が無事でよかった」

フェルトは純粹に嬉しそうだった

「マスター」

刹那とフェルトは驚いた表情を浮かべた
そして刹那は声がしたポケットの中に手を入れる
ポケットの中には青い宝石が入っていた

「お前は？」

「私です。エクシアです」

「っ！エクシア！？」

刹那とフェルトはなぜエクシアがこの姿になってしまっているのか不思議に思ったが、今は現状を確認する方が先だと思った

「エクシア、俺たちはどうなったんだ？」

「マスターたちは、私と0ガンダムの爆発で起きてしまった次元断層に飲み込まれ、こちらに来てしまったようです」

「次元断層ってあの空間に穴が空いてた…」

「フェルトの言うとおりです。あの時マスターは気絶していたので気づきませんでした。フェルトはそれを見ていたのです。そしてここ、この世界はマスターたちがいた世界ではありません」

「…どういうことだ？」

「次元断層で異世界に来てしまったようです。私も気がついたらこの姿に…」

「そうか」

「そしてこの世界はミッドチルダという魔法の世界です」

「魔法？」

「二人が知っているような絵本に載っているような魔法ではなく、体の中にあるリンカーコアというものがあることと、デバイスとい

う機械を駆使して魔法を使つようです。お二人のなかにもリンカーコアはあります」

「私にも？」

「はい。フェルトはそれほどではありませんが、マスターの魔力値はSS+です」

「！」

刹那とフェルトは驚いたが、それはエクシアの言葉によりすぐに水に流される

「マスター！こちらに接近してくる正体不明の機体を30機確認！」

「えっ！？」

フェルトは少し怖がっていた
仕方がない

フェルトは普段、トレミーでオペレートをする
直接戦闘には出ないのだ

「心配するなフェルト」

フェルトは刹那を見る

「フェルトは俺が守ってやる！」

「っ！」

刹那と言う

仲間を死なせはしない！

そして突如二人にエクシアが言っていた機影が到着しようであり、二人に攻撃をしてきた

「ちっ！」

「えっ！？キヤッ！」

刹那はフェルトを抱きかかえて走る

フェルトは少し顔を赤くする

刹那はフェルトをお姫様抱っこしている
女性だったら赤面してもおかしくはない

「マスター戦いましょう！私の名前を言ったあとセツトアップと言ってください！」

「了解！エクシア、セツトアップ！」

そして刹那の体が光り始めた

フェルトは眩しくて目を閉じる

そしてフェルトは体に違和感があることに気がつく

体にゴツゴツしたものがくっついていた

目を開けると、そこにはエクシアとなった刹那がいた

刹那はフェルトを下ろすと、敵に体を向ける

「隠れているフェルト」

「う、うん」

刹那は右手の実体剣を展開した

「エクシア、刹那Fセイエイ、目標を駆逐する！」

刹那は背中からGN粒子を吹かせて敵に突撃していった
フェルトは刹那を心配そうに見ていた

私はガジェットが出現したポイントに親友のフェイトちゃんと一緒に
向かっていた

「最近、ガジェットの出現率高くない？」

「そうだね…あと、ここに来る途中でガジェットともう一つ魔力反
応がなかった？」

「なのはも？」

どうやらフェイトちゃんも感じたみたい

そして現場付近まで近づくと、そこでは、

「なのは！あれ…」

緑の粒子が空に向かって溢れていた

最初は驚いたけど、すぐに別の感想が出てきた

「綺麗…」

「うん、そうだね…」

そしてその粒子は消えた

私たちはガジェットを目視できる距離まで近づいた

だが、ガジェットの中に先程の粒子を放出しながら、ガジェットを切り裂いていく

下にはガジェットの残骸が転がっていた

「すごい！あのロボットが一体で？」

「とにかく行こうなのは！」

「うん！」

刹那は30機いた機体をひと桁まで減らしていた

「遅い！」

1機を後ろから横なぎに切り裂いて、近くにいるもう1機に向かって、要背部のビームダガーを投げる
ビームダガーは1機に突き刺さり爆散する
すかさず刹那はビームライフルを放つが、敵に当たる前にビームが弾かれた

「なに！？」

「マスター、あれはAMFと呼ばれるものです」

「AMF？」

「マスターが使用するライフルはビームではなく魔法です。あれは魔法を防ぐバリアのようなものです」

「…そうか」

刹那はここまで接近戦で戦っていた
今ここでこの出力でのライフルは無意味だということが分かった

「なら接近戦でいく！」

刹那は実体剣を展開して、敵に切りかかる
そしてラスト1機になる
刹那は最後の1機に突撃する

「これが、俺たちの、ガンダムだ!!」

最後の1機をまっぴたつにして、刹那は実体剣を折りたたむ
そして地上に降りて刹那はバリアジャケットを解除して、フェルト
のもとへ向かう

「刹那、ケガはない?」

「ああ。問題ない」

「そう…よかった」

フェルトが安堵した表情を見せる

「マスター、先ほどとは比べ物にならない魔力を感知しました」

「なに?どこだ?」

「こちらに近づいています。これは…人です」

人か…なら情報も手に入れられるかもしれない
刹那はそう思った

「刹那、あれ…」

フェルトが上に指を向けると、そこには茶髪の髪で白い服に身を包

んだ女性と金髪の髪をして黒い服に身を包んだ女性が降りてきた

「時空管理局です」

「時空管理局？」

刹那とフェルトが首をかしげていると頭に声が響いた

マスター、フェルト

（！なんだ、エクシアか？）

（頭に声が響く）

これは念話というもので魔法の一種です。心で相手に話しかけるようにすればできると思います

こうか？

刹那の声が聞こえる

時空管理局とは私たちの世界にあった連邦のようなものです

（連邦と同じ…）

なら、そこも…

「あのー聞いてますか？」

茶髪の女性が無視していると思われたのか、少し怒ったような声で

話しかける

「すまない」

「一つ聞きたいのですが、これはあなたがやったんですか？」

金髪の女性が指を指すと、その方向にはさっきの機体の残骸が転がっていた

「ああ」

「なら詳しい話を聞きたいので、ついてきてもらってよろしいですか？」

フェルトは刹那を見る

「私は刹那を信じて付いていく」

「…了解」

「あつ、申し遅れましたが、私は時空管理局機動六課スターズ分隊長高町なのは一等空尉です」

「同じく機動六課ライティング分隊長フェイト・T・ハラオウン執務官です」

「フェルト・グレイスです！」

フェルトは礼儀正しく挨拶する

若干声が上ずっていたような気がした

「あなたは？」

「刹那・F・セイエイだ」

これが刹那とフェルトの異世界での戦いの始まり

episode 1 (後書き)

駄文ですが、読んでくれたら嬉しいです
意見などをお願いします

episode 2

刹那たちはなのはたちに連れられ、今は機動六課隊舎隊長室にいる刹那とフェルト前には茶髪のショートカットの女性と銀髪の髪の小さい少女が浮かんでいた

「はじめまして、機動六課部隊長八神はやてです」

「リインフォース？ですう！」

二人が挨拶してきたため、刹那とフェルトも挨拶する

「フェルト・グレイスです」

「刹那・F・セイエイだ」

自己紹介を終え、本題に入る

「早速ですが、二人はなぜ森にいたんですか？」

「わからない。俺たちは気がついたらあそこにいた。だが、こいつのおかげでこの世界のことについてはだいたい理解した」

刹那はポケットから青い宝石を取り出す

「はじめまして、マスターのデバイスのエクシアです」

『！喋った！？』

「そんなに珍しいんですか？」

フェルトが問う

「こんなに高性能なデバイスは見たことがないよ」

なのはは驚いていた

「刹那さん、このデバイスをどこで？」

これにはエクシアが答える

「私はこの世界に来たときにはこの姿になっていました。そしてマスターたちは地球から来ましたが、この世界の地球とは違う地球、並行世界から来ました」

「並行世界ということは二人は次元漂流者ということになるね」

「そうやね」

「あの〜次元漂流者ってなんですか？」

「何らかの拍子に他の次元世界に偶然漂流してしまった人たち、つまりは迷子のようなものです」

「元の世界に帰る方法はないのか？」

「今のところはわかりません」

「そうか…」

「みんな心配してるだろうな…」

フェルトの頭の中に仲間たちの顔が浮かんでいく

「それで二人は今は泊まる場所はないということですね？」

「ああ」

刹那一人ならなんとかなるが、フェルトは…

「なら、機動六課で民間協力者として働いてみませんか？」

「どうしてです？」

「ミッドチルダでは、無断でデバイスを所持することは禁止なんですよ。民間協力者ならそういったことを未然に防げるし、それに時空管理局は正直言って人員不足なんですよ。だから力を貸して欲しいんですよ」

「…わかった。ただしデバイスに関してはここ以外での情報開示は遠慮してくれないか？」

「わかりました」

これで刹那とフェルトの機動六課での戦いが決まった

「これからよろしく頼む。あと敬語は必要ない。慣れてないからな」

「うん。二人ともええな？」

「うん。これからよろしくね！刹那君！フェルトちゃん！エクシアも！」

「よろしくね。刹那、フェルト、エクシア」

「よろしくお願いします！」

フェルトは少々固かった

「ハハッ、フェルトちゃん、敬語はいらないよ？」

フェルトは仲間の前でしか普通にしゃべらない

「はい」

「リイン、二人を隊舎の中の案内お願いな」

「はい！はやてちゃん！行きましょう刹那さん、フェルトさん！」

「ああ。頼む」

「お願いします」

そして三人は部屋を出ていった

「それにしてもここに男の人が来るのも久しぶりやな」

「そうだね。六課はほとんどが女性だからね」

「それにしても二人とも、森のガジェットはどうなってたん？」

「全部破壊されてたよ」

「どうゆうことや？」

「刹那君が全部破壊したと思う」

「ほんまかい!？」

「うん。それにまだまだ余裕みたいだったよ？」

「とんでもないな、刹那君は…」

刹那の強さに三人は驚いていた

「それにしても刹那君でかつこええな」

これを刹那が聞いたらどうなるのだろうか…

「まあ、なのはちゃんにはユーノ君がおるからな」

はやてはニヤニヤしながらなのはを見る

「えっ？ユーノ君はただの友達だよ？」

はやてとフェイトはその場でずっこける

そして告白もしていない無限書庫の司書長の恋は幕を閉じた

「フェイトちゃんは？」

なのははフェイトに話を振る

「私もそう思うけど、それ以上に刹那の目には決意とか悲しみとかあった気がする」

「どうしてそう思うの？」

「刹那の目を見ると、何か私と似たような目をしていたから…過去に何かあったと思うんだ」

「でもこれは刹那君の口から聞くしかないよね」

「そうだな。それに過去はどうあれ、明日から仲間なんや！みんなで何かあればフォロースタろう！？」

「うん！」

「そうだね」

そして刹那に頼もしい仲間が出来た
フラグ予備軍もね…

機動六課の中を案内された二人は、リインに連れていってもらった
自分たちが使用する部屋にいた

「どうしたらいい？」

部屋には最低限の物資は置いてあった
だが、問題はベッドが一つしかないということだ

「フェルト、俺はソファで寝る」

そう言つて刹那はソファの上で横になる
疲れが刹那の体を蝕んでいた
刹那が眠りに就こうとしたその時、フェルトが刹那の腕を引っ張った

「どうした？」

刹那を見ると、フェルトの顔は少し赤かった
少しもじもじしているし…

「刹那、一緒に寝ない？」

「ハッ？」

そう言うとフェルトの顔がさらに赤くなった

「刹那は戦った後なんだからちゃんと休まなくちゃ…」

さらに赤くなっている

これではフェルトが爆発するのではないかと思った刹那はため息を
つきながら答える

「…わかった」

フェルトの顔が明るくなった

（マスターも罪な男ですね）

エクシアはそう思った

そして二人は結局二人で寝ることになった

episode 2 (後書き)

今回は短めです

意見などあったらよろしく！

なにかリクエストもあればおねがいします！頑張ってみるんで！

episode 3

刹那は夢を見ていた

白い服を着た茶髪のツインテールの少女と黒い服に身を包み金髪のツインテールの少女が戦っていた

戦況は金髪の少女の方が有利だった

結果は金髪の少女の勝利という形で終わった

だが、金髪の少女の表情はどこか悲しそうな表情をしていた
そしてそこで映像は途切れ辺りが真っ白になっていく

「うつ…」

「刹那、大丈夫？」

「…ああ。心配ない」

刹那は目を覚ますとフェルトがCBの制服を着て隣で刹那の心配をする

（あれは一体…？）

刹那は夢のことを疑問に思うが、あの二人が誰かなのかは曖昧だった

ただ、なぜあの夢を見たのかはわからない
刹那はため息をつきながら時計を見る

「六時…」

「少し早く起きちゃったね…どうするの？」

早く起きたからといって刹那たちは特にやることはなかった
しばらく悩み、フェルトが提案した

「なら、隊舎内を見回ってみない？昨日も見ただけど全部は見れてないし…どうかな？」

「別に構わないが…」

「なら行こっ！」

そして刹那はCBの制服に着替え、フェルトと共に隊舎内を歩くことになった

刹那とフェルトが隊舎内を歩いていると、何処からか物音が聞こえてきた

「なんだろう?」

「向こうから聞こえてきますね」

「…行ってみよう」

そして二人は物音がする方へ歩いていった

刹那たちが向かった先では、海の上にビル群の廃墟があった

「あつ、刹那君とフェルトちゃんおはよう!」

「二人ともおはよう」

すると、こちらに手を振っている高町なのはとフェイト・T・ハラ
オウンの姿があった

「おはようございます」

「おはよう」

二人は挨拶をすると、前方に映っている映像の方に目を向けた

そこでは四人組の子供がガジェットと戦っていた
それを見た刹那は顔を陰しくした

（なぜ子供を戦わせている？ここの人間はなんとも思わないのか？）

刹那はそう思った

反政府組織カタロンの基地には子供がいた

だが、彼らは子供たちを戦わせたり、戦いをさせるために育てているわけではなかった

だが、ここの人間はどうだ？

平気で子供を戦わせてそれを見て心の中でどう思っているのかは知らないが、平気な顔でそれを見ている

刹那は時空管理局に歪みを感じた

だが、刹那のやることは変わらない

歪みがあればそれを断ち切る

そして刹那は心の中でその歪みを断ち切ることを決意した

『私も手伝いますよマスター。私はマスターと共にありますから』

エクシアから念話が聞こえ、刹那は心の中で感謝した

「お前たちが例の民間協力者か？」

すると刹那とフェルトは後ろを振り向くと、そこにはフェルトの髪より薄いピンク色のポニーテールの髪をし凛とした雰囲気を持った女性と小さい活気溢れた子供？がいた

「誰だ？」

「すまない。私はシグナムだ」

「ヴィータ」

「フェルト・グレイスです。よろしくお願いします」

「刹那・F・セイエイだ。どう呼んでもらっても構わない」

「そうか…ならばセイエイ！私と模擬戦をしてくれないか？」

なんだこいつ？戦うことが好きなのか？

だが奴とは違って強い奴と戦ってみたいという感じだな
と、刹那は思った

「了解した」

『すまねえな。あいつはいつもこういう感じなんだ』

念話でヴィータが謝ってきた

刹那は気にするなと念話を送った

「じゃあ、二人の模擬戦だね…みんな訓練一旦中止！」

なのはが廃墟にいる四人組にそう言うと、こちらに四人が向かってきた

「なのはさん、一体何があるんですか？」

青い髪の少女がなのはに訊く

「え」とまず自己紹介からだね。これから民間協力者と一緒に

戦うことになる刹那さんとフェルトさんだよ」

「フェルト・グレイスです。これからよろしくね」

「刹那・F・セイエイだ。よろしく頼む」

「はい、みんなも自己紹介」

なのはに言われて、四人も自己紹介をする

「スターズ3、スバル・ナカジマ二等陸士です！」

「スターズ4、ティアナ・ランスター二等陸士であります！」

「ライトニング3、エリオ・モンディアル三等陸士であります！」

「ライトニング4、キャロル・ルシエ三等陸士です！それとこの子はフリードリヒです」

「キュル」

刹那とフェルトは目の前にいる竜を見て驚いていた
フェルトは子供たちを見て何か疑問に思っていたが、それを口することはなかった

「自己紹介も済んだな…ならばセイエイ模擬戦を始めよう！」

「了解」

「刹那！」

刹那は後ろを振り向くと、そこには心配そうな瞳で刹那を見るフェルトがいた

「怪我…しないですね？」

「…わかっている」

そう言って刹那はシグナムと共に廃墟に向かっていった
フェルトは先ほどの目とは違う目で刹那を見ていた

「それにしてもすごいですね。海の上に廃墟があるなんて」

「にはは…実はこれ本物じゃないんだ…」

空中にモニターが現れ、そこにはなのはの顔が映し出されていた

「ホログラムのようなものか？」

「うーん、だいたいそんな感じかな」

なら相当高度な技術だろう

ソレスタルビーイングでさえも多分ここまではできないだろう、と刹那とエクシアは思っていた

「そろそろ始めるか、セイエイ」

「そうだな…エクシア武器は全て非殺傷設定にしてあるか？」

「もちろんです」

「すまない。感謝する」

そして刹那は目を瞑り、頭の中でイメージするイメージを完了したと同時に刹那は瞼を開き、

「エクシア、セットアップ！」

刹那はガンダムエクシアとなった

刹那たちの模擬戦を見るメンバーは刹那の姿に驚いていた

服が変わり、体が騎士甲冑に似ているが、顔はV字のアンテナのよ
うなものがあり顔は隠され、どこか青と白をベースとした機械のよ
うなものを身にまとい、右手には折り畳まれた大剣、腰には大小二
本の実体剣を装備した刹那の姿があった

背中からは淡い緑色の粒子が放出されていた

「かつこいいですね…」

「そうだね…最初見たときもそれ思ったよ」

エリオとなのはは感想を述べる

「それにしても刹那から何か不思議な空気を感じるんだけど…」

フェイトの言葉になのはとヴィータ、そしてフェルトは気がついて
いた

さっきまでとは何か違う雰囲気を感じている三人だった

「刹那…」

フェルトは刹那をずっと見ていた

シグナムは刹那の姿を見て驚いていた

「それがお前のデバイスか？」

「そうだ…これが俺のガンダム、『ガンダムエクシア』だ」

「フツ…では始めるか」

そう言うときグナムは剣を構える

刹那も右手のGNソード改を展開して構えた

そして二人の戦いが始まる

「ヴォルケンリッターが将、烈火の将シグナム参る！！」

「ガンダムエクシア、刹那・F・セイエイ、出る！！」

そして二人の模擬戦が始まった

episode 3 (後書き)

いやゝ今回は何となく頑張ってみました！

ここまでしたのは初めてだと思います

ただし、戦闘描写がうまく書けるか不安…

意見やリクエストもどしどし送ってください！

ユーザーじゃなくてもいいですからね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6645y/>

リリカルなのは00 StrikerS

2011年11月29日22時02分発行